

球、後頭葉等の血流低下を認めた。対照群との比較では、解離性障害群にて小脳半球の血流低下が有意であった。以上より、解離性障害が中枢神経系の何らかの機能異常と関係する可能性が示唆され、同時に特徴的な脳血流低下パターンより、客観的な診断方法、鑑別診断としての SPECT の有用性が示唆された。

9. CNS ループスの ^{99m}Tc -ECD 脳血流 SPECT

菊川 薫 外山 宏 古賀 佑彦
(藤田保衛大・放)
片山 雅夫 鳥飼 勝隆
(同・感染症リウマチ内)
西村 哲浩 加藤 正基 (同・病院放部)
江尻 和隆 前田 寿登 仙田 宏平
竹内 昭 (同・衛生学部診療放)

SLE の経過中に精神症状を呈することは、しばしば認められるが、その有力な診断法はない。われわれは、CNS ループスを疑った症例に ^{99m}Tc -ECD SPECT の早期像、後期像を施行し、その臨床的意義について検討した。対象は、SLE にて、治療経過中の、15 症例 (CNS 群 5 人、非 CNS 群 10 人) で、SPECT にて得られた画像を、4 Type に分類し、比較検討した。CNS 群の方が陽性率が高かったが、非 CNS 群は後期像で前頭葉内側の集積の低下を認めた例を含むと、陽性率は上昇した。前頭葉の内側は、SLE 症例の大脳皮質で最も脆弱な部位である可能性があり、ECD SPECT の後期像の有用性が示唆された。

10. 心電図同期 ^{99m}Tc 心筋血流 SPECT における左室容積値、駆出率自動算出の検討 ——健常人における評価——

木下 佳美 祖父江亮嗣 大河内幸子
岡野 美穂 伊藤 雅人 南部 一郎
三村三喜男 (名古屋第二赤十字病院・放)
七里 守 平山 治雄 (同・循内)
遠山 淳子 大場 覚 (名市大・放)

Quantitative Gated SPECT (QGS) について健常人による評価を行った。[対象] 健常人ボランティア 8 名。

[方法] テトロホスミン 600 MBq ボーラス静注し、first pass の収集を行った。1.5 時間後に心電図同期心筋 SPECT の収集 (L 字型 180° 収集と対向型 360° 収集) を行った。心エコーは Teichholz 法にて LVEF を算出した。[結果] EDV, LVEF は L 字型で対向型に比べやや低値に算出された。LVEF は L 字型、対向型ともに first pass と相関し、L 字型で心エコーと相関した。血流像、局所 EF、壁運動、壁肥厚のブルズアイの画像の平均画像を作成した。局所 EF、壁運動は中隔側で低下し、壁肥厚では心基部側で低下していた。

11. ^{99m}Tc -MIBI を用いた局所心筋血流量定量

土田 龍郎 高橋 範雄 楊 景涛
山本 和高 石井 靖 (福井医大・放)
定藤 規弘 米倉 義晴 (同・高エネ)
中野 顕 (同・一内)

^{99m}Tc -MIBI (MIBI) の持続静注と Dynamic SPECT により局所心筋血流量の定量化を試みた。MIBI 740 MBq (20 mCi) を 20 ml に希釈し、シリンジポンプにて持続静注を行うと同時に、Dynamic SPECT を撮像した。Patlak plot にて解析を行い、心筋への influx constant (Ku) を求めた。これを ^{13}N -NH₃ による局所心筋血流量 (F) と比較したところ、Ku と F の間には $Ku = 0.057 + 0.220F$, $r = 0.83$ と良好な相関が得られ、MIBI の持続静注と Dynamic SPECT を用いた局所心筋血流量定量の可能性が示唆された。

12. ^{123}I 心筋製剤を用いたファーストパス法による安静時心機能評価

清水 正司 藤山 昌成 豊嶋心一郎
富澤 岳人 亀田 圭介 金澤 貴
渡辺 直人 瀬戸 光 (富山医薬大・放)

[目的] ^{123}I 心筋製剤を用いたファーストパス法による安静時心機能評価。[対象] 1 週間以内に ^{99m}Tc と ^{123}I の両方のファーストパス法を施行された虚血性心疾患の患者 28 例。[方法] 多結晶ガンマカメラ SIM400 に高感度コリメータを装着し、エネルギーウィンド幅は 135–180 keV、カットオフ値は約 10% とした。 ^{123}I -MIBG・BMIPP は 111–148 MBq (3–4 mCi) 使用した。[結果] ^{99m}Tc に比べ、 ^{123}I による LVEF 値は約 10%